日女御前御返事　　弘安元年六月二五日　　五七歳

御布施七貫文送り給び畢(おわ)んぬ。囑累(ぞくるい)品の御心は、仏虚空に立ち給ひて、四百万億那由他(なゆた)の世界にむさし(武蔵)ののすすき(野芒)のごとく、富士山の木のごとく、ぞくぞく(簇簇)とひざ(膝)をつめよせて頭を地につけ、身をまげ(曲)掌をあはせ(合)、あせ(汗)を流し、つゆ(露)しげくおはせし上行菩薩等・文殊(もんじゅ)等・大梵天王・帝釈(たいしゃく)・日月・四天王・竜王・十羅刹(らせつ)女等に、法華経をゆづ(譲)らんがために、三度まで頂をなでさせ給ふ。譬へば悲母の一子が頂のかみ(髪)をなづ(撫)るがごとし。爾(そ)の時に上行乃至日月等 忝(かたじけな)き仰せを蒙(こうむ)りて、法華経を末代に弘通せんとちかひ給ひしなり。

薬王品と申すは、昔喜見(きけん)菩薩と申せし菩薩、日月浄明徳(にちがつじょうみょうとくぶつ)仏に法華経を習はせ給ひて、其の師の恩と申し、法華経のたう(尊)とさと申し、かんに(感)たへ(堪)かねて万の重宝を尽くさせ給ひしかども、なを心ゆかずして身に油をぬ(塗)りて千二百歳の間、当時の油にとう(灯)しみ(心)を入れてたく(焚)がごとく身をたい(焚)て仏を供養し、後に七万二千歳が間ひぢ(臂)をとも(灯)しびとしてたき(焚)つくし、法華経を御供養候き。されば今法華経を後五百歳の女人供養せば、其の功徳を一分ものこさずゆづるべし。譬へば長者の一子に一切の財宝をゆづるがごとし。妙音(みょうおん)品と申すは、東方の浄華宿王智仏(じょうけしゅくおうちぶつ)の国に妙音菩薩と申せし菩薩あり。昔の雲雷音王仏(うんらいおんのう)の御代に妙荘厳王(みょうしょうごんのう)の后、浄徳(じょうとく)夫人なり。昔法華経を供養して今妙音菩薩となれり。釈迦如来の娑婆世界にして法華経を説き給ふにまいりて約束申して、末代の女人の法華経を持ち給ふをまもるべしと云云。観音(かんのん)品と申すは、又普門(ふもん)品と名づく。始めは観世音(かんぜおん)菩薩を持ち奉る人の功徳を説きて候。此を観音品と名づく。後には観音の持ち給へる法華経を持つ人の功徳をと(説)けり。此を普門品と名づく。

陀羅尼(だらに)品と申すは、二聖・二天・十羅刹女の法華経の行者を守護すべき様を説けり。二聖と申すは薬王と勇施(ゆぜ)となり。二天と申すは毘沙門(びしゃもん)と持国天(じこくてん)となり。十羅刹女と申すは十人の大鬼神女、四天下の一切の鬼神の母なり。又十羅刹女の母あり、鬼子母神是なり。鬼のならひとして人を食す。人に三十六物あり。所謂糞(あくた)と尿(いばり)と唾(つばき)と肉と血と皮と骨と五臓と六腑(ふ)と髪と毛と気と命等なり。而るに下品の鬼神は糞等を食し、中品の鬼神は骨等を食す。上品の鬼神は精気を食す。此の十羅刹女は上品の鬼神として精気を食す。疫病(やくびょう)の大鬼神なり。鬼神に二あり。一には善鬼、二には悪鬼なり。善鬼は法華経の怨(あだ)を食す。悪鬼は法華経の行者を食す。今日本国の去年今年の大疫病は何とか心うべき。此を答ふべき様は一には善鬼なり。梵王・帝釈・日月・四天の許されありて法華経

の怨を食す。二には悪鬼が第六天の魔王のすゝめによりて法華経を修行する人を食す。善鬼が法華経の怨を食らふことは、官兵の朝敵を罰するがごとし。悪鬼が法華経の行者を食らふは、強盗夜討等が官兵を殺すがごとし。例せば日本国に仏法の渡りてありし時、仏法の敵たりし物部大連・守屋等も疫病をやみき。蘇我宿禰・馬子等もやみき。欽明・敏達・用明の三代の国王は心には仏法・釈迦如来を信じまいらせ給ひてありしかども、外には国の礼にまかせて天照太神・熊野山等を仰ぎまいらせさせ給ひしかども、仏と法との信はうすく、神の信はあつかりしかば、強きにひかれて三代の国王疫病疱瘡にして崩御ならせ給ひき。此をもて上の二鬼をも今の代の世間の人々の疫病をも、日蓮が方のやみしぬをも心うべし。されば身をすてゝ信ぜん人々はやまぬへんもあるべし。又やむともたすかるへんもあるべし。又大悪鬼に値ひなば命を奪はるゝ人もあるべし。例せば畠山重忠は日本第一の大力の大将なりしかども、多勢には終にほろびぬ。又日本国の一切の真言師の悪霊となれると、並びに禅宗・念仏者等が日蓮をあだまんがために国中に入り乱れたり。又梵釈・日月・十羅刹の眷属日本国に乱入せり。両方互ひに責めとらんとはげむなり。而るに十羅刹女は総じて法華経の行者を守護すべしと誓はせ給ひて候へば、一切の法華経を持つ人々をば守護せさせ給ふらんと思ひ候に、法華経を持つ人々も或は大日経はまされりなど申して、真言師が法華経を読誦し候はかへりてそしるにて候なり。又余の宗々も此を以て押し計るべし。又法華経をば経のごとく持つ人々も、法華経の行者を或は貪瞋癡により、或は世間の事により、或はしなじなのふるまひによって憎む人あり。此は法華経を信ずれども信ずる功徳なし。かへりて罰をかほるなり。例せば父母なんどには謀反等より外は、子息等の身として此に背けば不孝なり。父が我がいとをしきめをとり、母が我がいとをしきをとこを奪ふとも、子の身として一分も違はば、現世には天に捨てられ、後生には必ず阿鼻地獄に堕つる業なり。何に況んや父母にまされる賢王に背かんをや。何に況んや父母・国王に百千万億倍まされる世間の師をや。何に況んや出世間の師をや。何に況んや法華経の御師をや。黄河は千年に一度すむといへり。聖人は千年に一度出づるなり。仏は無量劫に一度出世し給ふ。彼には値ふといへども法華経には値ひがたし。設ひ法華経に値ひ奉るとも、末代の凡夫法華経の行者には値ひがたし。何ぞなれば末代の法華経の行者は、法華経を説かざる華厳・阿含・方等・般若・大日経等の千二百余尊よりも、末代に法華経を説く行者は勝れて候なるを、妙楽大師釈して云く「供養すること有らん者は福十号に過ぎ、若し悩乱する者は頭七分に破れん」云云。今日本国の者去年今年の疫病と、去ぬる正嘉の疫病とは人王始まりて九十余代に並びなき疫病なり。聖人の国にあるをあだむゆへと見えたり。師子を吼ゆ

る犬は腸(はらわた)切れ、日月をのむ修羅(しゅら)は頭の破れ候なるはこれなり。日本国の一切衆生すでに三分が二はやみ(病)ぬ。又半分は死しぬ。今一分は身はやま(病)ざれども心はやみ(病)ぬ。又頭も顕(けん)にも冥(みょう)にも破(われ)ぬらん。罰に四あり。総罰・別罰・冥罰・顕罰なり。聖人をあだめば総罰一国にわたる。又四天下、又六欲・四禅にわたる。賢人をあだめば但敵人等なり。今日本国の疫病は総罰なり。定んで聖人の国にあるをあだむか。山は玉をいだけば草木か(枯)れず。国に聖人あれば其の国やぶれず。山の草木のか(枯)れぬは玉のある故とも愚者はしらず。国のやぶるゝは聖人をあだむ故とも愚人は弁(わきま)へざるか。

設(たと)ひ日月の光ありとも、盲目(めしい)のために用ゆる事なし。設ひ声ありとも、耳し聾(ひ)のためになにの用かあるべき。日本国の一切衆生は盲目と耳し聾(ひ)のごとし。此の一切の眼と耳とをくじりて、一切の眼をあけ、一切の耳に物をき聴(か)せんは、いか程の功徳かあるべき。誰の人か此の功徳をば計るべき。設ひ父母子をう産(み)て眼・耳ありとも、物を教ふる師なくば畜生の眼・耳にてこそあらましか。日本の一切衆生は十方の中には西方の一方、一切の仏の中には阿弥陀仏、一切の行の中には弥陀(みだ)の名号(みょうごう)、此の三を本として余行をば兼たる人もあり、一向なる人もありしに、某(それがし)去ぬる建長五年より今に至るまで二十余年の間、遠くは一代聖教の勝劣・先後・浅深を立て、近くは弥陀念仏と法華経の題目との高下を立て申す程に、上一人より下万民に至るまで此の事を用ひず。或は師々に問ひ、或は主々に訴へ、或は傍輩(ほうばい)にかたり、或は我が身の妻子眷属に申すほどに、国々・郡々・郷々・村々・寺々・社々に沙汰(さた)ある程に、人ごとに日蓮が名を知り、法華経を念仏に対して念仏のいみじき様、法華経叶(かな)ひがたき事、諸人のいみじき様、日蓮わろ(悪)き様を申す程に、上もあだみ、下も悪(にく)む。日本一同に法華経と行者との大怨敵となりぬ。かう申せば日本国の人々並びに日蓮が方の中にも物におぼえぬ者は、人に信ぜられんとあらぬ事を云ふと思へり。此は仏法の道理を信じたる男女に知らせんれ料うに申す。各々の心にまかせ給ふべし。

妙荘厳王品と申すは、殊(こと)に女人の御ために用ふる事なり。妻が夫をすゝめたる品なり。末代に及びても、女房の男をすゝめんは、名こそかわりたりとも功徳は但浄徳夫人のごとし。いはうや此は女房も男も共に御信用あり、鳥の二つの羽そなはり、車の二つの輪(わ)かゝれり。何事か成ぜざるべき。天あり地あり、日あり月あり、日てり雨ふる、功徳の草木花さき菓なるべし。次に勧発品と申すは、釈迦仏の御弟子の中に僧はあまたありしかども、迦葉(かしょう)・阿難(あなん)左右におはしき。王の左右の臣の如し、此は小乗経の仏なり。又普賢(ふげん)・文殊と申すは一切の菩薩多しといへども、教主釈尊の左右の臣なり。而るに一代超過の法華経八箇年が間、十方の諸仏菩薩等、大地微塵よりも多く集まり候ひしに、左右の

臣たる普賢菩薩のおはせざりしは不思議なりし事なり。而(しか)れども妙荘厳王品を説(とか)れてさて終(おは)りぬべかりしに、東方宝威徳浄王仏(とうほうほういとくじょう)の国より万億の伎楽(ぎがく)を奏し、無数の八部衆を引率して、おくれば馳(せ)して参らせ給ひしかば、仏の御気色(きそく)や悪(あし)からんずらんと思ひし故にや、色かへて末代に法華経の行者を守護すべきやうをねん懇ごろに申し上られしかば、仏も法華経を閻浮に流布せんこと、ことにねんごろなるべきと申すに賞(やめ)でさせ給ひけん。返りて上の上位よりも、ことにねんごろに仏ほめさせ給へり。

かゝる法華経を末代の女人、二十八品を品々ごとに供養せばやとおぼしめす、但事(ただごと)にはあらず。宝塔品の御時は多宝如来・釈迦如来・十方の諸仏・一切の菩薩あつまらせ給ひぬ。此の宝塔品はいづれのところにか只今ましますらんとかん考がへ候へば、日女御前の御胸の間、八葉の心蓮華の内におはしますと日蓮は見まいらせて候。例せば蓮のみ実に蓮華の有るがごとく、后の御腹に太子を懐妊せるがごとし。十善を持てる人、太子と生まれんとして后の御腹にましませば諸天此を守護す。故に太子をば天子と号す。法華経二十八品の文字、六万九千三百八十四字、一々の文字は字ごとに太子のごとし。字ごとに仏の御種子(みたね)なり。闇の中に影あり、人此をみず見。虚空に鳥の飛跡あり、人此をみず。大海に魚の道あり、人これをみず。月の中に四天下の人物一もかけず、人此をみず。而りといへども天眼は此をみる。日女御前の御身の内心に宝塔品まします。凡夫は見ずといへども、釈迦・多宝・十方の諸仏は御覧らんあり。日蓮又此をすい推す。あらたう貴としたう貴とし。

周の文王(ぶんおう)は老いたる者をやしなひていくさに勝ち、其の末三十七代八百年の間、すゑ末ずゑ末には、ひが事ありしかども、根本の功によりてさか栄へさせ給ふ。阿闍世王(あじゃせおう)は大悪人たりしかども、父びんばさら頻婆沙羅王の仏を数年やしな養ひまいらせし故に、九十年の間位を持ち給ひき。当世も又かくの如く、法華経の御かたきに成りて候代なれば、須臾(しゅゆ)も持つべしとはみえねども、故権大夫殿(ごんのたいふ)・武蔵前司入道殿(むさしのぜんじにゅうどう)の御まつりごと政事といみじくて暫(しばら)く安穏なるか。其れも始終は法華経の敵と成りなば叶(かな)ふまじきにや。此の人々の御僻案(びゃくあん)には、念仏者等は法華経にち知いん音なり、日蓮は念仏の敵なり、我等は何れをも信じたりと云云。日蓮つ詰めて云く、代に大禍(だいか)なくば古(いにしえ)にすぎたる疫病・飢饉・大兵乱はいかに。召(めし)も決せずして法華経の行者を二度まで大科に行ひしはいかに、不便(ふびん)不便。而るに女人の御身として法華経の御命をつがせ給ふは、釈迦・多宝・十方の諸仏の御父母の御命をつがせ給ふなり。此の功徳をもてる人一閻浮提の内にあるべしや。恐々謹言。

六月廿五日　　日　蓮　花　押

日　女　御　前